戦乱逃れたノーベル賞作家

長崎居留地ドキュメント
ブライアン・バークガフニ
38

パール・バックと長崎

昭和2（1927）年3月、蔣介石の国民党軍が中国・南京に入城し、外国の領事館、公邸、企業などを襲撃した。多数の欧米人が城壁近くのスタンダード・オイル社敷地内に避難し、その後、米英合同の上陸部隊によって救出された。南京からの避難者の中には、米国の女性作家パール・バック（1892~1973年）がいた。彼女は夫や娘と共に、着の身着のまま軍艦に乗り込み、長江を下って上海経由で長崎へと逃れた。

パール・バックは、プロテスタントの宣教師である両親に連れられて、幼少期に中国へ渡り、米国と中国の間を往復する航海の中で、何度か長崎を訪れていた。中国の田舎を舞台にした小説「大地」で最もよく知られているが、この作品は世界的なベストセラーとなり、中国の農家の厳しい日常の実態に、これまでにない光を当てた。昭和13（1938）年、彼女はノーベル文学賞を受賞した。

英字新聞『ナガサキ・プレス』に掲載された船舶情報によると、パール・バックは米国人16名の一団に加わり、昭和2（1927）年4月16日に日本郵船会社の連絡船「上海丸」で長崎に到着したという。後に刊行された自伝の中で、彼女は長崎に落ち着いた時のことを次のように回想している。

「再び静かで清潔な通りを歩き、小さな宿へ行って安らぎの部屋に身を委ね、長々とお湯に漬かる日本式のお風呂に入り、おいしい和食を味わい、そして眠りに就く―何時間もの眠り！私は、その心身のリフレッシュのひとときを、一瞬一瞬をどれほどかみしめたことか。そして目を覚ますと、親しみやすく礼儀正しい人々が往来する通りを歩き、家々をまるで海へと押しやろうとしているかのような山々に、夕霧が立ち込める様子を眺めた」

長崎で休んだ後、一家は自動車で雲仙に移動し、森の中のコテージに入居した。そのコテージは、現在の鴛鴦（おしどり）ノ池の近く、外国人が「カズノコヤマ」と呼んでいた地域にあり、プロテスタント教会が宣教師たちの避暑地として借り受けていた。パール・バックは、コテージでの滞在を次のように回想している。「この素朴な場所に私は癒やしを見いだした。松の木の香りが空気いっぱいに広がり、森の静寂は平和そのものだった」

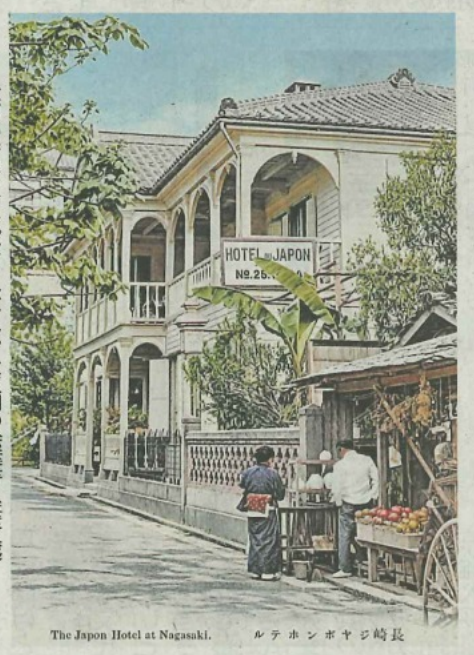
パール・バックは同年9月に雲仙を離れ、長崎に戻った。そこで、旧長崎居留地の裏通りにたたずむ西洋式のジャパン・ホテルに数泊した後、日本郵船の連絡船に乗り込み、上海へと渡った。その後、バック一家はフランス租界のアベニュー・ジョッフル（現在の淮海路）にある住宅に数カ月間居住し、南京に帰還する機会を待った。長崎と雲仙での休養と安らぎの数カ月に活力を得て、パール・バックは上海で代表作「大地」を書き始めた。

（グラバー園名誉園長）

月1回掲載します

長崎と雲仙に滞在


長崎と雲仙に滞在した頃のパール・バック（筆者蔵）



大浦25番地のジャパン・ホテル。大正期の絵葉書（筆者蔵）



上海丸が出島岸壁から離岸していくのを見送る人々。1934年の絵葉書（筆者蔵）